

「家庭」をめぐるジェンダー・ポリティクス

——「家庭」と文学をめぐる言説編成——

鬼 頭 七 美

「家庭小説」というジャンル名は、「帝国文学」誌上において一八九六「明二九」年あたりから使われはじめ、その後、四〇五年の間、中央文壇を賑わすタームとなっていたが、「家庭」という語自体は、この約一〇年前頃から「女学雑誌」を皮切りとして世紀の変わり目頃に多方面において広く使われた言葉であった。七種の総合評論誌を分析した牟田和恵によれば、「明治―執筆者注」二〇年代後半から三〇年頃を転換点として各誌での家族の取り扱いが変わり、「家庭や家族は公論の対象から除外され、もっぱら女性を対象として女性にのみ関わるものとして語られていくようになる」という。⁽²⁾

だが、すでに拙稿で論じたように、今日の事典や解説、概説書の類における「家庭小説」についての説明文のなかで、その筆頭に必ず掲げられる菊池幽芳の「己が罪」(前編は一八九九「明三二」年八月一七日―一〇月二二日、後編は一九〇〇「明三三」年一月一日―五月二〇日)と中村春雨の「無花果」(一九〇一「明三四」年三月二八日―六月一〇日)とは、「大阪毎日新聞」に連載された当初、実は書き手と読み手の双方において家庭小説というジャンル意識はなかった。⁽³⁾すでに「帝国文学」などの中央文壇において家庭小説と

いう言説自体は使い回されていた時期に、のちに「家庭小説」というジャンルにカテゴライズされる二つの新聞小説が、家庭小説として書かれたのでも読まれたのでもなかったという事態は、「家庭」と言えば女性の領域というような、「二〇年代後半から三〇年頃」を転換点とするような言説空間の力学とは別の力学が働いていたことを意味している。このことは、限定された雑誌に基づきながら明治という時代全体の傾向を析出しようとした牟田の論考では、「家庭」言説が平板で単純な一枚岩のものとして描出されるという限界をも示しているだろう。だが実際には、本稿で考察するように、「家庭」という語は、メディアが異なれば、その使われ方や意味内容が異なってくるし、文学と絡めて話題となるときにもまた、その使われ方や意味内容が変容する言葉であった。だから、牟田が言う「二〇年代後半から三〇年頃の転換点」というものも、簡単には成立しないのではないだろうか。

そこで、本稿では、今日「家庭小説」にカテゴライズされる小説の多くが連載された「大阪毎日新聞」の紙面構成を丹念に検証することで、「家庭」や「家庭小説」といった言説が、そこでどのように扱われ、「己が罪」や「無花果」といった連載小説とどのように

結びついていくのか、その様相を確認していきたい。

一 「家庭」のための「健全なる文学」

新聞連載時における「己が罪」は、新聞読者に対する配慮から、その前編と後編がそれぞれ別の物語として読まれる可能性を前提として書かれていた。実際、「大阪毎日」の投書欄「落葉籠」に寄せられた読者の声を見る限り、前編では専ら親子関係（「子」とは男女両性を含む「子女」）における教育効果が読み取られていたのに対し、後編では夫婦関係ないし家庭における感化・啓蒙の効果が読み取られていた。そして、このことは明らかに「大阪毎日」における紙面での他の記事と連動していた。⁽⁴⁾

一八九九「明三二」年の八月から一〇月にかけて「己が罪」前編が連載されている最中、「大阪毎日」においては文学欄の梶子入れを行うべく、社説「健全なる文学」⁽⁵⁾（九・一四）において、「常識に富む文学」「健全なる文学」のない日本の文学のために、「健全の思想と常識に富める」「英文学趣味を注入するに勉めよ」との主張が展開されるとともに、この約一週間後、文学欄に幽芳の「啓上」（九・二二）が掲載され、関西文壇に対する英文学趣味注入のため、幽芳の弟である文学士の戸澤正保（藐姑射山人）を客員として迎え、「英文学史談」の連載が告知され、実際、半年間に亘って連載された（一八九九・九・二三～一九〇〇・三・二三、全三八回）。また、「己が罪」前編の連載終了後（二〇・二一に終了）には、未発達で未成熟な日本の文学の「趣味の段階」を論じた後藤宙外の「趣味の段階と文学」（二〇・二三）という文章が掲載されたことも注目すべきであろう。宙外によれば読者のあり方は、第一段階とし

て「事柄の筋に専ら趣味を置く」読者、第二段階として「事柄の遷次と文章の趣味とを併せ読む」読者、第三段階として「前二者の観取する所のものを合せて更に加ふるに世態の機微と人情の真趣とを味ふ」読者の三段階に規定され、第一段階から第三段階に向かって漸次、読者が導かれていく必要性が論じられている。ここでは「低き者」「高き者」、「有害」「無害」「滋養分の饒多なる物」、「低き趣味」「高き趣味」というような優劣論によって読者が分けられ、それぞれの段階に応じた小説を提供しつつも、最終的には全ての読者が第三段階に至ることが希求されている。要するに、ここで語られているのは「健全」で「趣味」のよい文学が登場することへの期待であるが、この背景として想起されるのは、現状における社会全体（とりわけ関西社会）が未発達の状態にあること、日本（とりわけ関西）の人々の読書に対する姿勢もまた、未発達の状態であるということだ。そして、水谷不倒が「小説の好題目」（一一・二四）において述べるように、「家庭小説は、其呼声高けれども、是迄我が文壇には産れざりき」という状態にあると認識されていたのである。

ここで注目しておきたいのは、こうした言説に頻出する「健全」と「趣味」という言葉である。この二つの語は、この当時において文学以外の物事を語る上でも様々な局面で使い回されていた言葉であったが、とりわけ文学を語る際のキーワードとなっていた。特に「健全」の語は、一八九三「明二六」年頃の「文学界」グループと民友社との対立のなかで前者が後者によって「不健全」のレッテルを貼られたり、一八九五「明二八」年頃に流行した観念小説、悲惨小説等を「不健全」だと呼んだりするなど、ネガティブな文脈において流通しており、このような小説の流行に対して「健全光明」の

小説が待望されていく(戸川秋骨「近年の文海に於ける暗潮」、「文学界」一八九六「明二九」・一)。家庭小説という語も、このような流れのなかで登場してきたジャンル名であり、前代の「不健全」な小説の流行に対するカウンターとして「家庭小説」の名のもとに「健全」な小説が待望されるのだが、これは理念が先行するのみで実態としての小説はどこにもまだ書かれていない状態であった。

ところが、「大阪毎日」の紙面をつぶさに検証するときに浮上するのは、「己が罪」後編が連載されている最中に、この小説が読者によって「家庭」ないし「家庭小説」と結びつけて読まれているという実態を、新聞社サイドが次第に自覚していく様相である。

「己が罪」後編は、前編連載の翌年、一九〇〇「明三三」年一月から五月までの長きに亘って連載され、単行本化の際には中編と後編の二冊に分けて刊行されるほどに長いのだが、この連載時の前半にあたる一月から二月にかけての間、物語のなかでは、無妻主義の桜戸隆弘に対して叔母の綾子が「楽しい家庭」「幸福なる家庭」「暖かい家庭」を説き聞かせ(第七回、第一〇回、第二七回など)、隆弘と環との結婚を実現させ、隆弘と環も「幸福な家庭」が成り立っているという実感を抱く(第三三回・三五回)、という展開が進行中であつた。このあと、さらに環の懷妊が分かると、綾子は「夫婦の愛」「神聖の愛情」「真正の愛情」を味わうことのできた隆弘は今や「幸福な家庭」を築くことができたのだと隆弘を称賛し(第四〇回)、出産のあとには語り手も「愛の極意」を説き、「二身同体の愛」こそ「真実の愛情」だと言う(第四七回)。

こうした「己が罪」の物語内での「家庭」言説を受けるようにして、一九〇〇「明三三」年二月には、投書欄「落葉籠」において恋

愛論が盛んとなる。「落葉籠」では改行のないまま投書が並べられているが、市井の話題、相撲、連載小説への感想など、話題ごとに整理して掲載されており、「己が罪」への直接的な感想とは別に、この恋愛論についての投書がひとかたまりとなっている。そして、こうした話題のなかでも、しばしば幽芳および「己が罪」の名が散見されるのである。すなわち、「愛」に関する金言を二ツ三ツ教へて下さい、ならば幽芳足下に聞きたきものなり(ベツシミスト)(二・一九)という投書からはじまり、「ベツシミスト君よ、愛とは幽芳君否立花綾子夫人の説れし如く最も真正なるものあり(略)幽芳君の如き今後の己が罪に依つて大いに神聖なる恋愛の極致を発揮せらる、ものならんと信ず多謝々々(プラトール)」「(二・一三)や、「真正の恋を知らんとせば幽芳君の己が罪を熟読し玉へ真正の恋とは何ぞといふことを全篇が説明して居るのである(注告生)」「(二・二〇)」などというように、恋愛論と言えば「己が罪」という連想を働かせる読者の姿を見出すことができるのである。こうした登場人物たる綾子の発言を、そのまま作者の幽芳の言葉として受け取る投書などには、小説を単に物語として享受するのみならず、そこから教養、教訓を得ようとする読者の読書態度が透けて見える。そして、このように新聞読者の注目を集めたこの小説に対しては、「屢々東京の文壇に叫ばれて未だ実現し来らざる家庭小説のこの関西文壇に現はれたるものにあらざる幽芳子の想と筆とを以てして空前の喝采を博しつ、ある事決してその偶然にあらざるを認む(沈黙文士)」「(二・二七)」という投書が寄せられることとなる。

このような読者の反響を受けた「大阪毎日」は、一九〇〇「明三三」年三月以降、すなわち「己が罪」後編の後半が連載されてい

る時期、その紙面において、にわかに「健全」で「趣味」のよい文学というものを、家庭で読まれるべき文学として意味づけはじめる。例えば、櫻井芳水の「文学と家庭」(三・三二)では、「文学趣味」の欠乏している大阪人士に、とりわけその家庭に、文学を勧めたいと述べながら、「円満なる家庭は趣味ある家庭なり、趣味ある家庭は趣味ある娯楽によりて之を形づくり得べし、而して趣味ある娯楽は文学に如くものあらじ」、「(略)一家内に小図書館を設け、(略)家庭の読物としてあらゆる有益なる書籍を備へつけんこと最も妙なるべしと思ふ」と言う。芳水はまた「健全なる文学」(五・七)においても、かつての悲惨小説の流行は「作家の思想の不健全」を示していると述べて「健全なる文学」を待望しており、この「健全なる文学」とは「清潔にして家庭に容れられるべき者」「常識を以て読まれ得べき者」「其趣味の高尚にして卑汚に失せざる者」だと説明している。一方、「家庭」という言葉こそ出てこないものの、梁田晴嵐の「時文小観」(二)(三・一二)では、幼稚だと噂される関西の読者にとって幽芳の「己が罪」は「難渋の文字」「倦厭の読本」なのではないかと心配したが、「落葉籠」を見ると「幾万の読者が、能く之を精読黙解して、驚くばかり」だと述べ、関西読者の、驚くべき非常なる好評を博しつ、ある」ことを喜び、幽芳が読者に「情の趣味」を与えることに成功しつつあると論じている。そして、以上のような展開を受けて、「大阪毎日」では、社説「新聞小説(上・下)」(五・二二・二三)において、新聞小説の機能についての定義を試みている。いわく、もはや新聞小説が「続きもの」として劣等視されていた時代は過ぎ去ろうとしており、いまや日本の小説、なかならず日本人の「読小説趣味」は「刊行小説」よりも、むしろ新

聞小説によって発達し養われており、「日本人は総て新聞紙によって教育せらるゝの有様」である以上、新聞小説が「読者に及ぼす趣味の感化」の重要性は言うまでもない(上)。新聞小説の責任は「刊行小説」に比して大きい、それは「己が罪」のような小説が、日本の読者の「趣味」を教育し感化する力を発揮していたことを思えば、新聞社および新聞小説を書く者はその責任の大きさを自覚するべきだ(下)。このような文言から見えてくるのは、「大阪毎日」が「己が罪」の反響の大きさによって、新聞小説というものの果たすべき役割について自覚を新たにしていくな様子である。

このように、「大阪毎日」では、「己が罪」前編が連載されていた一八九九「明三二」年の間には、「健全」で「趣味」のよい文学が単純な形で期待されており、このとき読者に紹介し啓蒙する文学的素材も英文学であったのに対し、「己が罪」後編が連載されていた一九〇〇「明三三」年に入り、「己が罪」のなかで「家庭」言説が展開され読者の大きな反響を受けると、紙面において家庭と文学とを結びつける言説を展開し、読者の啓蒙を図ろうとしはじめるのである。いまだ「家庭小説」というジャンルにカテゴライズされていない「己が罪」が「家庭」言説と結びつく瞬間がここにあったと言えるだろう。

二 「大阪毎日新聞」と「家庭」メージ

「健全」で「趣味」のよい文学を「家庭」に、という「大阪毎日」の読者啓蒙戦略は、「己が罪」連載が終了した一九〇〇「明三三」年五月以降も引き続いて行われた。管見によれば、少なくともその下限は、一九〇二「明三五」年の年明け頃であることを確認できる。

この読者啓蒙戦略の一端を示せば、例えば、一九〇一「明三四」年に掲載された社説「少年の読みものを作れ」(一・二八)・二・二に亘って四回掲載)では、「文学の家庭における地位を了解し得べきであり、「健全なる趣味を包める小説の、家庭に健全なる趣味を扶植するに効ある事尋常道德の書に倍する事を知るなり」と述べ、少年が読むに相応しい小説について論じており、平尾不孤の「家庭観」(二・一一)では、「趣味に乏しい大阪の家庭」では日常会話も金儲けなどの無趣味な話題ばかりであるから「読書癖を養成することが何よりも急務である」と大阪の地に話を限定しながらも、「我國民が文学を鑑賞するの趣味の低き」ことを嘆じ、「文学が一日も家庭を離るべからざるもの」となって「真に文学を味わう」ことのできる「偉大なる國民」となることを期待するというように、国全体に話を拡大して語っている。

だが、このような、文学と家庭とを直接的に結びつけて語る言説以上に眼を惹くのは、「健全」で「趣味」のよい「家庭」そのものの具体的なイメージの多さである。そのなかでも、とりわけ注目に値するのは、一九〇一「明三四」年に、家庭欄「かていのしをり」に掲載された平尾不孤の「家庭雑感 絵はがきの話」(一・二二)である。ここでは、「日本の家庭ほど無趣味なものはない」く、「國民に文学を鼓吹する前に先づ家庭を説く」必要がある、「家庭に趣味を普及するには、可成卑近な方面から導く」必要があるとして、西洋の絵はがきを具体例として取り上げ、これがいかに趣味に富んでいるかを分かりやすく説明している。西洋の絵はがきには「大概歴史上有名な詩人や政治家や、其外多くの偉人の肖像とか、地理上に於て或物を連想さすべき景色とか、乃至世界の名画とか、稀世の

宝器などの写真絵とか、古戦場とか古跡とか」が描かれており(具體的には、ゲエテ、シルレル、ルウテル、ナポレオンなどの名前が挙げられている)、このような絵はがきを見て、「家庭に於ける子弟はその父兄に向つて、父様これは何の絵ですか、兄様これは何のお話?と尋ねる、すると父兄はこれはこんな歴史を持てる話しだ、あの絵の人は非常な偉業をした人物だ、とか一々説明して聞かす。此間に家庭の教育は知らずくの間に行はれ」る有り様となるのだ言う。同様の事例として、「トルストイ伯の家庭」(四・二二)という記事も挙げられるだろう。このなかで、不孤の「家庭」イメージと重なるのは、九人の子どもたちがみな「兄弟姉妹打揃うて数ヶ国の語に通じ、又音楽に堪能にして一度伯が門を訪う者は家族に上下の隔なく、其家庭の如何にも快活に如何にも淡泊なるを感じざるを得ずと言ふ、是伯が方針としてルーソーの自由主義に基づき、兒女の教育を為し、敢て明りに之を叱責するが如き弊風を避くるの片影に外ならざるなり」という部分であろう。

この両者の記事に共通しているのは、家族内で親子が分け隔てなく教養ある会話を繰り広げる「家庭」イメージであり、これこそが「健全」で「趣味」のよい「家庭」の具体的なイメージであった。こうした「家庭」についての具体的なイメージは、この記事の前後にくつも見出すことができる。例えば、あきしくの「小児観察」(一九〇〇・三・一七)・四・四、「家庭の志をり」にて六回連載)や、あきしくの「よつちやんの帰省」(一九〇〇・二・一九)・一九〇一・二・一一、「かていのしをり」にて一六回に亘って連載)などにおいて、幽芳の子どもの愛らしい様子と、子どもを中心とした無邪気な家庭の様子が紹介されている。「よつちやんの帰省」と

併行して掲載された寒川つゆ子の「楽しき我が家」(一九〇〇・一二・一七〜一二・三〇、「かていのしをり」にて八回に亘って連載)においても、戦国大名の結城の一族だという寒川の家が、いかに新しい「理想の家庭」「スウヤートホーム」を作っていたかを物語るなかで、家族が友達のように会話をする様子や、家族で政治の話をしていると子どもまでが政治の話を無邪気にし始める様子、教養ある父が近所の人に新聞や雑誌を読んでもあげるので倶楽部のようになっていること、この父の話を聞きたさに近所の子どもたちがいつも集まってくることなどが「楽しい家庭」として描き出されている。りう子¹²「婦人の面影」(一九〇一・三・四〜五・二〇、全三二回連載)でも、社会的地位のある名望家の夫人や、独身のまま名をなした歌人や画家など、様々な女性が多数、紹介され、彼女らの育った家や嫁いだ先の家庭の様子が描き出されており、ここでは、家族の上下の隔てだけでなく、主従の上下の隔てさえもないこと、家族が小説や音楽を好むことなどが「一家団欒」「楽しい家庭」として語られている。二回に分けて掲載された虚吼生の「米国通信家庭雑話」(一九〇一・六・三・六・一〇)では、アメリカ在住の筆者によって当時のアメリカの家庭における文学趣味が紹介され、アメリカのような「家庭的楽しみ」を勧めるに当たって、「日本人の様に家庭で真面目腐つて居つては」いけないと彼我の違いが強調されている。

これらの記事に見られる、上下の隔てなく教養ある会話のできる「家庭」イメージの頻出は、当時の日本の「家庭」の現状と裏返し理想であり希望であった。例えば、当時においては子どもをしきりに「叱責するが如き弊風」(前掲「トルストイ伯の家庭」)がはび

こつていたり、特に大阪では日常会話が金儲けの話に終始したりするなど(前掲、不孤「家庭●観」)、「大阪の家庭では一家団欒の楽しみといふ事が至つて少な」く、「主人は多忙^{あるじ}しう商売に駆廻^{いそが}て居るのに、妻君は気楽さうに芝居観に行つて居るとか、(略)兎角別れ／＼に娛樂をする」ため、「固より文学だの高尚な音楽、絵画とかいふ様な思想は余り養はれて居」ないから、「自然談話の品位も下つて来て、芝居の話でなければ、役者、落語、其他芸人の品評^{しなせだ}めか、手近な人の善悪^{よあし}を云ひ合ふ」(岸本りう子「大阪の家庭」(三)(一九〇二・一・四)というような光景が常態となっていたからに他ならない。

だからこそ、「大阪毎日」としては、社説において「家庭改良」というものを喧伝し、読者の啓蒙を図らざるをえなかった。一九〇一「明三四」年に掲載された社説「社会改良と家庭」(一九一九)において、「社会を形作る」のは「家庭」なのだから、社会改良のために「家庭の改良」こそが今日の急務であり、「健全なる思想を社会に樹立」するために「健全なる家庭」を要望しており、社説「大阪人と家庭」(一九二〇)において、「家庭的思想に乏しい」「大阪人士」に対して、「家庭に対する健全なる思想」の涵養の末に「健全なる国民」の形成を企図している。「家庭改良」は、「社会改良」のため、ひいては「国家」や「国民」の改良のため、是非とも必要なのだという。ここにも「大阪毎日」における新聞というメディアの読者に対する役割や責任感というものを見出すことができるだろう。

以上、当時、まだまだ劣っていると実感されていた「大阪毎日」の読者、とりわけ大阪の読者に対する啓蒙戦略として、「大阪毎日」

では、論説文とは違う「家庭」の具体的イメージがこれでもかと言わんばかりに紙面上に配置され、上下の隔てなく教養ある知的な会話が展開されるような「家庭」の光景が理想的なイメージとして読者の頭に分かりやすく刷り込まれていたと思われる。「家庭」の「趣味」向上のために文学を、という議論が展開されているとき、その前提となる「家庭」観とは、概ね以上のようなものであった。

さらに、ここで留意すべきことは、一九〇〇「明三三」年から一九〇二「明三五」年の期間における、このような「大阪毎日」紙上での「家庭」イメージを強調した啓蒙的紙面構成の展開が、後年いわゆる「家庭小説」というジャンルに括られる小説の単行本刊行とピッタリと符合していることである。すなわち、具体的に言えば、一九〇〇「明三三」年一月には徳富蘆花の『不如帰』が、その年八月には『己が罪』前編が、翌年の一九〇一「明三四」年一月には『己が罪』中編が、同年七月には『己が罪』後篇と春雨の『無花果』が同時に、それぞれ刊行されるといった具合である。そして『無花果』が「大阪毎日」に連載されたのも、この期間内であった。連載中に好評を博したこれらの新聞小説が、単行本として刊行されることと、連載紙である「大阪毎日」において「家庭」イメージが強調されていたことは、これらの小説が後年「家庭小説」としてカテゴライズされていくことを考える場合、看過できない符合であると言えるだろう。

三 男性が領有する「家庭」

すでに述べてきたように、不孤の「家庭雑感 絵はがきの話」のなかでは、理想的な「家庭」の光景として、「父兄」と「子弟」の

会話の様子が具体的に描写され、紹介されていた。実は、この「家庭」イメージにおける「父兄」―「子弟」の前景化は、上記で紹介してきた「大阪毎日」の言説において一貫して保持されている論説態度であった。例えば、芳水「文学と家庭」では、「寒夜炉を囲みて近刊の小説を披き父老若くは子弟に之を説き聞かしめ、更に之を評し之を語りなば如何、霽然たる和氣の其間に生じて少くも一家融和の媒介たるものあるべし」というように「父老」―「子弟」が話題に上っていた。社説「社会改良と家庭」でも、「家庭の父たり母たるもの」に「家庭の何たるを自覚」させたい、「健全なる紳士は健全なる家庭より生」れるのだと主張し、社説「大阪人と家庭」でも、「父兄が、よくその家庭における神聖を保ち得べき」と、「中流以上を占むる処の紳士に」こそ「家庭の何ものたるを自覚し」てほしい、子女に対する「父兄の教育」が期待されていることを説くなど、「父」「父兄」「紳士」が前面に迫り出していた。不孤の「家庭●観」でも、「大阪の家庭に於ける父兄は、普に文学を容れざるのみならず、子弟に文学を味はうの余裕をさへ容さなぬ」というように「父兄」―「子弟」にとつての「趣味」ある「文学」が問題となっていた。

言うまでもなく、ここでいう「父兄」とは比喩的な言い回しとしての「保護者」の謂いではなく、明確にジェンダー規範の意識が内包されている、すなわち「男性」を示す言説であることは、社説「少年の読みものを作れ」において「父兄」と「母姉」という言葉が使い分けされていることによっても明らかである。この社説では、少年を善導し好感化を与えるために、まず「父兄の心掛」が期待されており、けっして「母姉の心掛」など期待されてはいない。この当

時にあって、新時代にふさわしい「家庭」とは「父兄」「紳士」と「子弟」といった男性たちによって作られるものであったのだ。

だから、この当時の「家庭」言説を捉え返す際に気をつけなければならないことは、今日の「家庭」という語の持つジェンダー・パリアスの感覚そのままに言説を読んではならないということである。もちろん、こうした「父兄／紳士」―「子弟」によって形作られるべき「家庭」についての具体的イメージの横で、「家庭」のなかでの女性の役割や、育児の場面における女性の責任といったように、「家庭」と言えば女性の領域という、今日的な「家庭」表象に繋がる語られ方も存在しており、これも「家庭」言説として無視しえない言説ではある。だが、こと文学を語る文脈においては、「家庭」はにわかに男性の領有物となり、「健全」で「趣味」のよい文学を「家庭」に注入するのは専ら男性の役割だとされる。そして注入される対象は「子弟」すなわち男児であり、けっして女児ではないのである。教養高い文学を扱うべきであるのは男性だという、文学が帯びたジェンダー規範が前提となる文脈のなかでは、新時代のキーワードたる「家庭」はけっして女性側にジェンダー化された用語ではなかったのである。だから、このような男性によって実現されることが期待される教養ある「家庭」のイメージは、「大阪毎日」紙上においても男性読者こそが念頭に置かれて提示されていたと言えるだろう。

そして、このような男性によってもたらされる「健全」で「趣味」のよい「家庭」イメージと、そこで読まれるにふさわしい文学についての当時の言語感覚というものを踏まえるとき、春雨の「無花果」が「大阪毎日」紙上で連載されるに先だって紙面に掲載された「懸

賞小説掲載の披露」（一九〇一・三・一八）という連載予告の記事の文言もまた、同様の文脈のなかで読み取られる必要があるだろう。すなわち、この記事のなかで「無花果」は、「所謂光明小説にして、同時に家庭に於ける良好なる読物」であり「子弟も読むべく、父兄も読むべく、教育家も、宗教家も、共に再誦を値す」る小説だと宣伝されていた（単行本化されたあとも、例えば「明星」（一九〇一・九）に掲載された広告には、ほとんど同じ文面による宣伝がなされている）。この宣伝文句を以て、「無花果」は今日的な意味でのいわゆる「家庭小説」＝婦女子の読みものとして登場したのだ、と言うことは、もはやできない。むしろ、「家庭」を担う「父兄」とその「子弟」という男性こそが読むべき新小説として「無花果」は紹介されていると捉えるべきである。

ここまで確認してきた如く、「大阪毎日」という新聞メディアにおける「家庭」イメージと文学との間にあった関係性に鑑みると、牛田が分析したように（「明治」執筆者注）二〇年代後半から三〇年頃を転換点として「家庭や家族は公論の対象から除外され」ていくと概括することは適切さを欠くと思われる。少なくとも「大阪毎日」においては、一九〇一「明三四」年前後に「家庭」が社説で繰り返し主題として取り扱われ、「公論」の対象そのものとなっていた。

しかも、後年になって「家庭小説」＝婦女子の読みものとしてカテゴライズされる「己が罪」も「無花果」も、他ならぬ連載紙である「大阪毎日」紙上において、いまだ「家庭小説」と呼称されてはいなかった。先述したように、投書欄「落葉籠」における「己が罪」こそ「家庭小説」ではないのか」という読者によるジャンル規定が

わずかに一度だけあったほかは、紙面において「家庭小説」の語自体が論説文等の話題に上ることは、本稿における当該期間中にはない。では、一体、いつ、どのようにして「己が罪」や「無花果」が「家庭小説」として括られていくのか。この疑問に応えるためには、そもそも新聞紙面において「家庭」と文学についての啓蒙言説（ただしその対象は専ら男性）と併置されていたこれらの小説が、その後、新派劇として舞台化され、何度も上演が繰り返されて、通俗的なドラマとして消費されていくという現象のなかで、捉え返される必要があるだろう。東京の文壇において、理念だけが先行する形で待望された「家庭小説」の具体的作品として、内田魯庵の「くれの廿八日」や蘆花の「思い出の記」が取り沙汰されていたことをも含めて、別に考察したい。

注(1) 金子明雄「明治三〇年代の読者と小説——『社会小説』論争とその後——」（『東京大学新聞研究所紀要』一九九〇・二）、飯田祐子「彼らの物語——日本近代文学とジェンダー——」（名古屋大学出版会、一九九八・六）等。

なお、「帝国文学」における「家庭小説」言説の様相については、先行研究を踏まえつつ、日本文学協会の第二五回研究発表会（二〇〇五・七・一七、於奈良教育大学）において、「小説」をめぐる言説編成（『社会』と『家庭』のあいだ——というタイトルで口頭発表を行っており、別稿を予定している）。

(2) 牟田和恵「戦略としての家族——近代日本の国民国家形成と女性——」（新曜社、一九九六・七）。なお、牟田が分析の対象とした総合評論誌とは、『明六雑誌』『近事評論』『家庭叢談』『六合雑誌』『国民之友』『中央公論』『太陽』の七種である。また、小山静子『家庭の生成と女性の国民化』（勁

草書房、一九九九・一〇）も、牟田の先行研究を踏まえた論考となっている。

(3) 拙稿「紙面の中の「己が罪」——大阪毎日新聞「落葉籠」欄にみる読者たち——」（『日本近代文学』二〇〇六・五）、「家庭小説」再考のために——中村春雨「無花果」論——」（『日本近代文学』二〇〇九・一二）参照。

(4) 拙稿「紙面の中の「己が罪」——大阪毎日新聞「落葉籠」欄にみる読者たち——」、前掲論文。

(5) 「大阪毎日」における社説は基本的に無署名記事であるが、この後に言及する「啓上」において幽芳が書いたと明かされている。

(6) これらは枚挙にいとまがないが、一例を挙げれば、「健全」の場合では、「日本女子の不健全」（一八九九・一一・一六）というタイトルの社説が見受けられるほか、社説「学生以外の体育」（一八九九・一一・二三）では、「健全なる精神が健全なる身体に宿るの言」、家庭欄「家庭の栞」では、「健全の小児」、「不健全な炬燵」（※不経済の意）（一九〇一・一二・一四）などがある。「趣味」の場合では、このあとにも、いくつか例示するもの以外に、「今の社会は趣味なき社会なり」（『市花生「漫言」一九〇〇・五・一一）、「社会一般に興味が低い」（※斎藤藤雨の発言を紹介する文面のなかで）（後藤宙外「文壇雑俎」一九〇〇・五・三二）などがある。

(7) 十川信介「ドラマ・「他界」——明治二十年代の文学状況——」（筑摩書房、一九八七・一一）所収、「不健全な文学Ⅰ」、「不健全な文学Ⅱ」を参照。この「健全光明」の小説の待望は、やがて社会小説、理想小説、光明小説、家庭小説等の〇〇小説という名づけによって、中央文壇において喧しく論議されていくこととなる（注(1)参照）。なお、戸川秋骨の引用文はペンネームである早川漁郎を用いて発表されたものである。

(8) 文意の取りにくい投書であるが、以下のように「や」を補って読むべきと思われる。すなわち「己が罪は屢々東京の文壇に叫ばれて未だ実現

し来らざる家庭小説のこの関西文壇に現はれたるものにあらず【や】幽
芳子の想と筆とを以てして空前の喝采を博しつゝ、ある事決してその偶然
にあらずるを認む（沈黙文士）と。

(9) 「●」部分は、原紙の違う複数のマイクロフィルムによって確認して
みたが、いずれも文字がかすれていて読解不可能であつた。

(10) 「大阪毎日」における家庭欄は、「家庭の果」「家庭の志をり」「かてい
のしをり」など、時により表記が変化するが、内容との連動、使い分け
といったものはないように見受けられる。

(11) あきしくは、「家庭小説 乳姉妹」を「大阪毎日」に連載したときの
菊池幽芳のペンネームである。

(12) りう子は、「大阪毎日」の婦人記者、岸本柳子である。

(13) 岸本りう子の「大阪の家庭」は四回にわたつて連載された（一九〇
二・一・一―一・四）

(14) 蘆花の『不如帰』については、連載された新聞が「国民新聞」である
ため、別に検証が必要であらうと思われる。

受贈雑誌(四)

国文学研究	早稲田大学国文学会
国文学研究資料館紀要	国文学研究資料館
国文学研究資料館年報	国文学研究資料館
国文学攷	広島大学国語国文学会
国文学試験	大正大学大学院文学研究科
国文学踏査	大正大学国文学会
国文学論考	都留文科大學国語国文学会
國文學論叢	龍谷大學國文學會
国文白百合	白百合女子大学国語国文学会
国文橘	京都橘大学日本語日本文学会
国文鶴見	鶴見大学日本文学会
国文論叢	神戸大学文学部国語国文学会
国文論藻	京都女子大学国文学会
古代研究	早稲田古代研究会
語文	大阪大学国語国文学会
語文	日本大学国文学会
語文研究	九州大学国語国文学会
語文と教育	鳴門教育大学国語教育学会
駒沢国文	駒沢大学文学部国文学研究室
佐賀国文	佐賀大学教育学部国語国文学会
相模国文	相模女子大國文研究会